

私の学生時代

—開かれた知性を求めて—

山 崎 純 一

こんにちは文学部の山崎でございます。本日は、お招き頂きまして、大変に有り難うございます。

最初に自己紹介をさせていただきます。私の経歴は実に簡単です。富山県の富山市に生まれ、15歳までそこで育ちました。富山の中学校を卒業した昭和43年の4月に、東京小平に創価学園ができました。学園の高校1期生として入学をし、3年間寮生活をしました。学園卒業と同時に、創価大学が開学され、文学部社会学科へ1期生として入学しました。大学卒業の時に、大学院が出来、1期生として6年間、そこで勉強しました。大学院修了時に、大学から教員にと声をかけて頂き、教員となり、現在に至っています。簡単に申しますと、この創価大学に学生、大学院生として10年間、教員として28年間、お世話になっています。創価高校からですと、この創価の学舎で41年間過ごさせて頂いています。

ある日本の有名な哲学者が、自分の人生を振り返って、人生の前半は生徒として黒板の前に座って授業を受け、後半は教師として黒板を後ろにして授業をした、すなわち黒板に向って一回転したといえればそれで私の伝記は尽きる、と言ったそうです。私の人生もそういう意味では、黒板を中心にぐるりと一回りして今ここにあるということです。私の誇りは、池田大作先生という稀有の創立者が築かれた学び舎で前半を生徒、学生、大学院生として、後半を教員として、創価教育の建設に参画させて頂いていることです。

さて、この講演会のお話を聞いて、大変に悩み、逡巡しました。その理由は、皆さんに語るほどの思い出がありませんということ。つまらない生活体験記はたくさんあるのです。創価大学の学生はみんな貧乏でした。ある時あまりお金がないので、田舎の母に手紙を書いて、電話じゃありませんよ、米を送ってもらいました。お米を炊いて食べようにもおかずはない。どうしようかと思った時、醤油をかけてみると、なかなか美味しい。かつおぶしもあったので、これをばらばらとかけてみると、これもなかなかいけます。隣室の友人がマヨネーズを持っていて、ついでにこれもかけてみると、本当に美味しい。それにバターを乗せて食べた人がいましたが、これは胸焼けがしてあまり良くない。こんな貧乏話はたくさんあります。しかし、そんな話がこの講演会に相応しいとは思えません。

この創価教育研究所の講演会、創価大学の草創期を語るシリーズの登壇者は、滝山寮の初代の

全寮代表、第1回創大祭の実行委員長、本学で初めて公認会計士に合格された人、本学の大学院からアメリカはサンディエゴに渡って博士号を取得された方、等々です。要するに、本学を代表する方々ばかりです。しかし、私はそのような立場に就いた経験はありません。そういう意味で、極めて平凡で普通の学生でした。そういう人間がここで話すことに意味はあるのだろうか、と悩みました。しかし、多くの人は平凡で普通です。実行委員長になる方は代表者で、多くの人は平凡でその人を支えている。そういう意味では、大多数の普通の学生の一人として、お話しすることに意味がないことでもなかろう、ということでこの話をお引き受けしました。ですから、あまり華々しい話にはなりません。雑談を聞くような、ゆったりとした気持ちで臨んで頂きますと、大変にありがたいです。

私が創価大学を意識したのは、創価高校に入って2年目の春、昭和44年4月2日の創価大学の起工式でした。今の大学の敷地の一角、小高い丘の上にテントを張り、パイプ椅子を並べて、式典が行われました。その時に、風が吹き、砂埃が舞う中で、寮生の一員として、寮歌、今の創価学園の校歌を歌ったことを鮮明に覚えています。そんな縁もあって2年後、最初の入学試験を受けました。文学部の倍率が確か24.5倍だったと記憶しています。今と違ひまして、推薦制度はありませんでした。なんとか合格し、昭和46年4月10日第1回の入学式を迎えました。

当時の創価大学の入口は現在の栄光門だけでした。栄光門から路線バスが校内に入って、確か今のA棟前のロータリーにバス停がありました。そこに降り立ちますと、創価大学の全貌が望める。全貌と言っても、建物は3つしかない。ブロンズ像がある8階建の校舎、それから大教室棟と後ろの厚生棟、中央体育館です。それがすべてです。本部棟もなければ、池田講堂もなければ、C棟もなければ、教育学部棟もない。創価女子短期大学も、工学部も、正門も存在しません。今から思うと非常につましやかなキャンパスでした。

8階建て校舎壁面のミルクパープル、大教室棟正面のレンガ色、中央体育館の鉄傘の青、この3色が実に美しく、つつじの赤や白が鮮やかに彩りを添えて、入学式が始まりました。法学部、経済学部、文学部、文学部は社会学科と英文学科、3学部4学科754名の新入生が集いました。会場は中央体育館でした。新入生、保護者、先生方、職員の方を入れてもおそらく千数百人の出席者だったのではないのでしょうか。中央体育館の広い空間に千数百人ですから、がらんとしていました。学長のご挨拶などがありましたが、学生代表の元気一杯の挨拶だけが私には印象的でした。何となく物足りない、空虚感が残る式典でした。

そういう中で、何をしたらいいのか、何を学んだらいいのか、という議論が学生の中から巻き起こりました。そこで、ある意味で幼い18歳の私たちの議論をリードしてくれたのが、変な言葉使いをしますが、同期の先輩たちでありました。我々は皆1期生でしたが、その中に年上の人たちがたくさんいました。この人々は、例えば横浜国立大学に2年間在籍したとか東京理科大学に3年間いたとか、あるいは1度社会に出て、創価大学ができたので入学したとか、そんな人が多くいました。入学式の後で、学部や学科のガイダンスがありました。教室で職員の方が前で説明

されていましたが、どう見ても、職員より老けた人が何人か座っている。この人たち一体、何だろうと思いました。その人たちが実はいろんな知恵を我々に与えてくれました。大学にはクラブがあるが、クラブを集めたのを学友会という、あるいは学生の意見を集約し実現する学生自治会というのがある。そういうことを、幼い我々に教えてくれた同期の先輩、その先輩に引き連れられて、私は自治会設立運動に参加することになりました。

自治会というのは、当時は学生運動やセクトの拠点であったりして、非常に危険な存在のように受け取られていました。しかし、学生の意見を集約するために自治会をつくらなければいけない。今であれば簡単に出来るのですが、当時は議論する人がたくさんいました。何のためにつくるのか、学生の総意をどう反映させるか、こんな議論を重ねていつまでも出来ない。その中で自治会設立をリードしたのが、先ほど申しました同期の先輩の1人でした。私はその方に誘われて、滝山寮の拠点の部屋に連れ込まれて、議論をして、ピラを書いて、そこで寝て、目が覚めたら、ブロンズ像の前まで行って、皆に「おはようございます！自治会作りましょう！」と挨拶しながら、ピラをまきました。時には教室で、時には寮で、時にはアパートで議論して、野外音楽堂で集会を行いました。あまり人が集まらないので、先ほど言いましたロータリーからバスが出ていたので、バスに乗りかけた友人たちをつかまえて集会に参加させたり、極めて激しい活動をしました。

そうこうするうちに11月、いよいよ第1回大学祭になりました。11月21日から23日まで、今とは違って11月の終わりに大学祭を行いました。実行委員長は、これも同期の先輩で、私の友人でもありました。この人にたまたま会いましたら、「山崎、大学祭で何をやるのだ？」と言うから、「特に何も決まっていません」と答えたら、「わかった、俺にまかせておけ」とのことでした。しばらくして、警備をやってくれとのことでした。当時の創価大学の周りは全部山です。当時、この周りで狩りをしてた人がいたのです。禁猟区の看板がありました。狩りをする人が来たなら、お引き取り願うのが警備の役割ということでした。

今思えば、文学の池の近くに焼却場があって、そのやぶの中に立って、警備をしました。「朝9時から夕方5時くらいまで」とその人が言うのです。やることないですから、「わかりました」とかなり素直に引き受けました。それで、3日間、8時間ずうっと立っていました。たしか、3日間で一人か二人、人が来ました。しかも鉄砲担いだ人でした。そこで、「すみません、ここは創価大学で大学祭やっておりますので、お引取り願えますか」と言いました。あとは大変に暇です。同期の先輩に「本を持っていっても良いですか？」と聞きましたら、「構わない」とのことでした。たまたま本棚に、今持ってきたのですが、岩波文庫のゲーテの『ファウスト』がありました。これは2巻本で結構厚いのですが、詩ですから、スペースが随分空いている。楽に読めるだろうなと思って、2冊持って、その山の中に立っていました。3日間で読了しました。

お読みになると良いと思いますが。冒頭ファウスト博士が出てきて、哲学も法律学も医学も神学まで全部勉強した。しかし、この虚しさはなんだ？と問いかける所から始まるのです。はっきり言って、良く分かりませんでした。かろうじて古典を読んだという事実が自分を満足させて

いました。今でもこの本は私の書棚にあります。あの大学祭から32年経って、2003年でしたが、創立者池田先生が、特別文化講座をして下さった。タイトルは「人間ゲータを語る」。それでその時に、懐かしいなと思って、改めて読み直して持って行きました。学生時代の読書というのはこんなところで生きてくるのですね。

この大学祭の記念フェスティバルで、創立者が公式に初めて大学にいらっしゃいました。フェスティバルでご挨拶されました。「苦勞して第1回の大学祭を運営した諸君の努力は、20年先30年先に、必ずや偉大な栄光の花として咲き薫ると私は信じております。今後諸君の後には何万、何十万という後輩が陸続と創価大学の門をくぐることでしょう。その後輩たちのためにも、先駆を切って道なき道を拓き、建学の精神に貫かれた人間教育の軌道をつくっていただきたいのであります」こういうご挨拶でした。創立者が、そういうご挨拶をされた時に、私のような山の中で立っていた人間のことも、創立者はわかって頂いているのだなど、大変感動しました。大変な感動、そしてまた頑張らなければいけないという決意、それが電流のように体中に駆け巡ったのを覚えています。

ここまでは良かったのです。しかし大学祭も終わり、自治会設立運動も一段落ついた。私は滝山寮にいたのですけれども、創価学園で3年間、寮生活をしたこともあって、寮を出るためにアパートを探しました。中央線に乗り、日野、立川、国立と物色しましたが、家賃や環境の問題もあって部屋を見つけられず、国分寺まで来て、なぜか西武国分寺線に乗り、鷹の台で降りました。ご存じのように、鷹の台には創価学園があり、私が高校3年間過ごした所です。なぜかそこで降りて、アパートを見つけたわけです、

創価学園の近くにアパート住まいを始め、1人暮らしを始めましたが、大学からは足が遠のいていきました。毎日アパートを出て、国分寺駅までは行く。そこから、中央線に乗り換えて、八王子に向かうのではなく、国分寺の駅から出て、商店街の喫茶店でコーヒーを飲み、そのまま古本屋さんなどに寄って1日過ぎて帰ってくる。あるいは友達と一緒に場合はビリヤードして帰ってくる、結局大学まではたどり着きません。八王子まで行っても、駅前のパチンコ屋で引っかかってしまう。

そのような暮らしで、学園の近くのアパートで悶々としている時に、八王子に住んでいる友人が訪問してくれました。特に、用件も言わず、こちらも聞かず、何日も私の部屋で共同生活をしました。最後には、「何しに来たの？」って聞いたのです。そしたら、「学校行こうよ」って、そう言うてくれました。それで、なんとか再び大学に行くことになりました。ただ、行くにしても、何を学んで良いか分からない。もちろん、文学部社会学科ですから、大学が準備した社会学の勉強をすれば良いのですが、なぜ社会学なのかが分からない。これにはずいぶん悩みました。

とにかく今と違いまして、人間教育論や21世紀文明論などの、創価大学に独自の科目はありませんでした。当時のことを確かめたくて、学生時代の履修要項を調べてみました。今、ここにあるのがそれです。B5判で200ページ、カリキュラムは非常にシンプルなものです。シンプルとは

あまり特色がないということです。この中に当時の4年生までのカリキュラムが全部入っている。一方、これが本年2009年度の履修要項です。これは少し判が大きいですが、200ページ。昔の方が充実していたとお思いでしょうが、違うのです。昔の履修要項には、講義の概要であるシラバスが全部入っています。数年前まで作っていたシラバス集は600ページあります。要するに、現在であれば2冊合わせて800ページ分が昔は200ページの冊子で足りていたのです。

量的にも内容的にも当時の創価大学の教育は、創価大学らしい授業もなく、良く言えばスタンダード、悪く言えば、建学の精神を反映した独自性がない。創立者の理念に共鳴して集った我々としては、物足りない。このことは創価大学ができた当時の状況と関係があるのかも知れません。小説『新・人間革命』の創価大学の章にもありますが、大学創立にあたって様々な批判があった。すなわち、創価大学は学会のエリート幹部を養成するところである、そこでは極めて偏った宗教教育が行われるに違いない、このような世間の非常に冷たい目があった。そういう中で創価大学は、普通の大学であることを打ち出さないといけなかったのかもしれない。もっと積極的に考えれば、創立者池田先生は創価大学を一宗一派のためではなく、まさに人類のために、世界のためにお作りになった。そこで、普遍的なカリキュラムで教育しよう、ということであったのかもしれない。

それにしても、もう少し創価大学らしいことができないのか。そこである学生たちは若手の先生方をつかまえて、自主的に勉強会を始めました。私も、先ほど申しました同期の先輩たちと一緒に勉強会を始めました。この人たちは、創価大学に入る前、様々な大学の学生だったわけですが、自然に集まって勉強会を行っていました。そうした人たちが、自分たちがかつて行っていた勉強会を復活させました。その中に私は巻き込まれていきました。この人たちが私に教えてくれたことは、創価大学、あるいは創大生の使命についてです。彼らによれば、創大生には、創立者が言われる仏法の理念を基礎にした人間主義と、それを基にした社会のあり方を探求し、それを社会に問う使命があるということです。

その時に、この人たちの優れていたのはこういうことです。彼らは他の大学にいて、その中で圧倒的に少数勢力でした。さまざまな党派や無党派の学生がいる中で、彼らが身に沁みて経験したことは、自分たちだけに通用する言葉、観念で勝負しても通用しない。自分とは違った信条、世界観、思想を持つ人にも通じる言葉で、確かな形で自分の理念を語れないといけない。すなわち、既存の学問、これを踏まえた上で、その限界を見据えて、普遍的な学問の言葉で自分の理念を語るべきである。独自性を発揮するためには、既存の学問、思想、哲学、理念を学び、いわば開かれた知性を求めるべきである、と強く強く私に迫りました。当時はマルクス主義の影響力が非常に強かった。マルクス主義を学ばなければいけない。そのためには、たしかレーニンでしたかね、マルクスが参考にしたドイツの哲学、イギリスの経済学、フランスの社会主義を理解すべきである。さらに言えば、古代ギリシャのプラトンの、対話編くらいは読まないといけない、と私に迫りました。

当時、私自身が悩んでいたことが一つあります。私自身は仏法を信じている。ところが当時の

社会科学の領域ではマルクス主義の影響力が非常に強くて、宗教は支配者を正当化する道具である、という見解が圧倒的でした。その中で、自分自身が宗教者であることの積極的な意味はあるのかが大きな悩みでした。その話をしたら先輩は軽く言いました。「マックス・ウェーバーを読めばいいんだよ」この人が本当に読んでいたのかは知りませんが、私は真剣に受け止めました。マックス・ウェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』を読みふけりました。そして「あ、これだ」と思いました。今から思うと当時の私の理解は誤りも多くありました。ただ少なくとも、宗教、理念、思想が、社会を動かす機動力の一つであるということは理解できました。それで初めて社会学科に入って良かったなと思えました。そんなことで、少しは学問への目が開いていきました。

こういう時に、私たちにとって実に助かったのは、外から講師を招いて、あるいは学内の先生方を招いて開いた勉強会というスタイルです。自分たちで勉強会を開いて、講師を招く。たとえば今でも時折21世紀文明論等で来て頂いている方がいらっしやいます。この方は若い時から、プラトンとかパスカルとかデカルトの勉強をされており、しかもそれと仏法との関連性を随分深く研究されていました。同期の先輩たちがこの方と知り合いだったので、勉強会に来てもらいました。大学の裏手にあったアパートの6畳一間に、その方を囲んで7、8人でハンス・ケルゼンの『神と国家』、プラトンの『テアイテトス』、キルケゴールの『死に至る病』の勉強会をしました。

キルケゴールの『死に至る病』は大変に有名な本です。これくらいはと勢い込んで本を開いて、冒頭の部分を読むのですが、さっぱり判らない。うん、うん唸って、本を睨みつけて3時間くらい考えましたが、分らない。もし良かったら読んでみてください。こんな風に、勉強会に臨んで、皆、教材に挑むのですが、よく分らない。分らないから、勉強会では押し黙るしかない。数人の男どもが押し黙って睨み合うような微妙な重苦しい雰囲気の中で、講師の方から「それでは老婆心ながら若干説明をします」と解説が始まる。皆それを聞いている。気の利いたのはノートを取る、それでも分らない。しかし、ここなのですが、下手なこと言ったら笑われる。少しでも分かった様な顔をしよう。なんというか、微妙なこの青年のプライドと言うか、自負心と言いましょうか。講師の方の話を聞くというより、分かったような顔をするのに疲れてしまう。もう一時間もするとヘトヘトになる。

「それでは今日はこれぐらいで」ようやく終わったという安堵感。その後は、謝礼代わりに酒盛りが始まります。お金がないので、一升瓶に入れて売っているような安いウイスキーやワインを買ってきて、がぶがぶ飲みました。勉強会での沈黙とは打って変わって、皆饒舌になります。延々と夜中まで喧騒の宴が続きました。この勉強会は、後に学生自治会に引き継がれて、自主講座と呼ばれるようになり、今日の21世紀文明論の基礎となったと思います。

今でも思い出します。何か勉強しなければいけない、何か読まなければいけない、焦りにも似た思い。しかし何を勉強したら良いのか分らないもどかしさ。そのなんとも言えない緊張感や焦燥感の中で、いわば生きているあかしを求めるように、手当たり次第とにかくぶつかったもの

は全部読んでみる。今でも思い出します。当時、日本育英会、今の日本学生支援機構から奨学金を頂いていました。一月に1万5千円だったと思います。本当はそれで生活しなければいけない。ところが、国分寺の本屋に入りましたらドストエフスキー全集が並んでいました。くらくらと目がくらみまして、奨学金のほぼ全額をはたいてドストエフスキー全集の内15冊を買って、電車に乗って帰ってきました。両脇に15冊の本を抱えて、とにかく重いのですが、それも心地よくて、意気揚々とアパートに引き揚げてきました。飯を食わなくてもドストエフスキーを読まなきゃ生きている意味がない、そこまで思い込んでいたのでしょう。とにかく思想的な深みを、人間としての深みをつけなければ、この創価大学を創られた創立者に申し訳ない、そんな風に考えていました。

40年間、創価の学び舎にいて、つくづく思うことは、友人に恵まれたということです。アメリカ創価大学の羽吹学長、本学の田代理事長、経済学部の馬場副学長、短大の石井学長、法学部長の花見先生、経営学部長の前田先生、東京学園の谷口高校校長、狩野中学校校長、松永小学校校長、皆さん創価高校の1期生です。こういう友人に出会えたことは、私の人生の誇りです。今でも忘れ難い友人が一人おります。

彼とは高校3年間、学園の寮で一緒でした。大学でも兄弟のように親しくしていました。稀に見る純粋な魂の持ち主で、「俺は、将来世界連邦をつくる」などと言っていました。カントの『永遠平和のために』が愛読書でした。まずは弁護士になろうと、創価大学の法学部で司法試験の勉強に没頭していました。しかし、現役では合格せず、卒業後はアルバイトをしながら勉強に励んでいました。一時期、彼は新宿に住んでいました。新宿のビルの裏手、陽も射さないような木造二階建てのアパートでした。

ある時、彼を訪ねました。ドアを開けようとしたら、ドアの前に何か置物がある。何だろうと見ましたら、生きている蛙でした。ガマが鎮座しておりました。中に入りましたら、その友人は、本当に金がなかったのでしょうか、栄養不足のような青白い顔をして勉強機に向っていました。湿気が激しくて、妙な虫が出たようです。米粒ほどの白い羽根を持った虫、これを捕まえて、それを一つ一つセロテープに貼り付けて、これが今日の成果だよ、などと冗談めかして言っていました。彼の勉強機の上には、創価学園の校訓が貼ってありました。「毎日、毎日、これを見ながら自分を励ましているんだ」、そんな風に言っていました。その純粋な気持ちに、深く感動したことを思い出します。

その後数年を経て司法試験に合格して、故郷に帰り、事務所勤めを経て、自分の弁護士事務所を持ちました。後輩を入れて、いよいよ本格的に活躍しようとした時に、筋肉が縮んでいく難病になりました。筋肉が縮んでいくとどうなるか、肺を動かす筋肉がだめになり、窒息死してしまう。1年ほどでしたでしょうか、結局40歳の人生でした。

今でも思い出します。先ほど申しましたように、創立者が我々に与えてくれた学園の校訓、その指針だけを頼りに自分の人生を切り拓いて、社会に貢献しようという一念を秘めていた、あの凄絶とも言うべき青白い彼の横顔を、今でも私は忘れることができません。そうした得難い友と

の機会を作って頂いた創立者に、恩返ししなければいけない時が来ています。創立者池田先生とともに、この大学を後世のための人類の光り輝く財産とすること、これが私の使命であると思っています。

最後になりますが、最近創立者がお話になった御指導を紹介させていただきます。創立者はあらゆる戦いに勝利してきたと、その最大の勝因は一体何であったか。それは一言で言うならば、「いついかなる時もわが心が師と共にあった」こと、これが第1番目の要因であります。第2番目は、「人間の世界には感情もある、利害もある、厳しき宿命も襲いかかる。しかし、日々突き当たる今の試練を乗り越える中でこそ、常勝の幸福のスクラムが堂々と築かれるのだ」と。ここからです。「わが使命を、誓いを、原点を忘れない人は強い、屈しない」これが2番目の要因です。最後ですが、「若き心に一生涯消えることのない心の宝、精神の宝、知性の宝を鍛え上げることが人間教育の一つの真髄である」これが3番目です。

学生時代に築いて頂いた創立者との縁を原点に、生涯に亘る心の宝を鍛え上げ、創立者が望まれる真の人間教育の担い手となるよう精進をして参ります。

以上で、私のつたない体験談を終えます。本日はご多用の中、ご来場、ご清聴頂きまして大変に有り難うございます。心から感謝申し上げます。